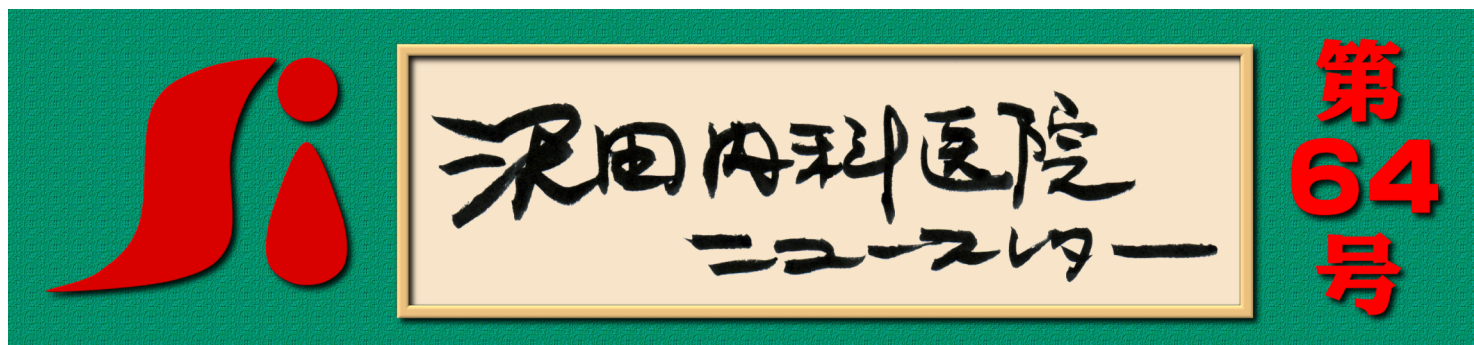




弘前四中の職場体験

今年も弘前四中の職場体験で3人の中学生が来ました。病院での職場体験を選んだだけあって将来は医療関係で働きたいようです。小山内竣哉君、木村梨乃さん、佐藤ころろさんの3人です。始まる前は、大きな声を出すことを目標の一つにしていたのですが、何せ慣れない場所で初めての体験ばかりの状態では声がなかなか出てこないのは当然です。



左から、小山内竣哉君、佐藤ころろさん、木村梨乃さん

最後の話し合いで3人に共通していたことは、病院で働いている人に対して持っていたイメージと、実際に体験してからのイメージがかなり違っていったことです。小山内君は、医師は患者さんを診察して検査をし、さらに薬を出すことを一人でやっていると思っていたようです。ところが私は診察はしますが、後のことはできるだけ他の人たちがやるようにしていますので、小山内君にはちょっと驚きだったようです。病院では医師一人では何もできず、看護師を初めとしたたくさんの人たちの協力で成り立っていることが分かったようです。

佐藤さんも木村さんも似たような印象を持ったようです。事務の人がどの薬がどの病気の時に使うのかということを知っているのにびっくりしていました。患者

さんが病院でお金を払うのはかかった費用の3割で、残りの7割は健康保険組合が払ってくれるので、事務職員はそれを請求する大事な仕事をしています。沢田内科医院は小さい医院ですので、誰がどの仕事をするということが決まっていません。看護師は検査もしますし、指示に従って薬局で薬の調合もします。そして受付で事務の仕事もします。検査技師も検査だけでなく薬局で仕事をしますし、パソコンを使って医療事務の仕事もします。大きな病院と違って、狭い範囲の仕事だけをしていてはうまく進まないからです。

中学校2年生が将来の職業をイメージするのはむずかしいでしょう。ただ、医療機関に限らず仕事をする時は、相手の人が何を求めているのかしっかり聞き出さなければなりません。慣れない場所ですからあまり声が出ませんでした。自分の思いをしっかりと日本語で表せること、相手が言いたいことをこちらがうまく聞き出すこと、このためにはコミュニケーション力が大事だということを強調しました。

今回は、私自身が非常に忙しくて3人とかかわる時間が少なかったのが残念でした。そのために、笑顔を作ってもらうのに4日もかかりました。学校から出された、「人はなぜ働くのだろう」という重い課題に対しての答えは、「生きがいを見つけたい」、「人の役に立ちたい」など模範的なものでした。この問いに対して正解はありません。それぞれが違って当たり前です。でも、やはり自分や家族が生活していくために、お金を得るという現実的なことをもっと強調していいと思いました。毎日の生活が第一なので、まず働いてみましょう。医院の経営に関しても、収入がなくて経営が成り立たなければどんな理想を掲げようともそれは実行できません。『恒産なければ恒心なし』といえますから。



沢田内科医院のクールビズ

7月4日から全員Tシャツで働いていますがかなり好評です。胸には「ブタ」の写真を、背中には「沢田内科医院」の文字を印刷したTシャツです。今年はクールビズがこれまでよりも広がるであろうということ、弘前四中の中学生の職場体験では何かユニホームのような服装をさせたかったことから、沢田内科医院オリジナルのTシャツを作りました。

色は濃紺に決まりました。汗をかいた時に白系統の色ではイヤだ、下のピンクとの組み合わせは紺がいい、などからこの色になりました。患者さんからは、「白衣の天使と言われるのに、全く逆の黒いを選んだのは誰のアイデアですか」、「病院で黒いユニホームを選ぶというのは発想が違いますね」、などと色についても反響があります。

Tシャツで動いていると、見ていてもテキパキと動いている印象を与えるようです。普段と違い、黒で体が引き締まって見えるからでしょうか？反響の言葉にもあるように、病院は

白というのが常識なのに反対の黒が新鮮に映るのかも知れません。病院の職員がTシャツで働いていること自体が好評のようです。

私の診察机の上にはブタの置き物があります。浴衣を着てうちわを持った涼しげなブタです。これを写真に撮ってプリントしてもらいました。ブタの置き物はたくさんあるのですが、これがベストだと思いました。「ゾウさんなどをマスコットにしているところはあるけど、病院でブタというのはなぜなんですか？」という人がいますが、ブタがいなければ今の沢田内科医院はなかったのですから当然です。

さて、予めちょっと狙っていたのですが、これを背中ではなく胸にプリントしました。つまり、プリントを鏡に見立てるのです。メタボ気味の人が、「これいいですねえ」と言うと、私は「実は、これは鏡なんですよ」と言います。頭の回転が速い人は、「・・・・・・！！」と笑い出すわけです。「・・・・。先生らしい発想ですねえ・・・・。」と

いう人も。「あれっ、先生もほんとに着てるんだ！」と診察室に入って私を見てびっくりする人もいました。

今年が最初です。来年どのような形にするかは今年の試みを終えてから考えることにします。どうせ働くなら楽しくなければいけません。私たちが実践していることで完全にオリジ



左から、小堀末希さん、成田華帆さん、福井絵梨果さん
背中には「沢田内科医院」とプリントしています。

ナルなものはありません。誰かがやっていることをまねているだけです。これからも何か目新しいことがないか、古いことでも面白いことがないかを探してみます。

看護師の院外研修

看護師は国家試験に合格するとすぐに就職ができます。看護学校では実習がありますが、看護師の国家試験に合格した後の研修はそれぞれの医療機関に任されています。病院の看護師として働く人、保健師となって働く人、老人保健施設で働く人、さまざまな働き方がありますので、それぞれに適した研修を受けて一人前になるのが実情です。医師の初期研修

のような定まった研修プログラムはありません。

沢田内科医院に勤務する看護師は8人、准看護師は4人です。ほとんどの人が大きな病院で働いた経験がありません。沢田内科医院で看護師として働いた経験がほとんどで他の医院での勤務経験がないと言っているでしょう。そこで、他の医療機関で研修ができないか考えてみました。ただ、あまり大きな病院での研修では、現在の勤務とあまりにかけ離れ

ているので除外しました。

外ヶ浜中央病院

小堀未希さんは今年の4月に看護師国家試験に合格しました。看護学生として大きな病院での実習の経験はありますが、実際に看護師として働くのとは内容が違います。そこで、外ヶ浜中央病院で研修をする計画を立てました。津軽半島の外ヶ浜町にあるこの病院はベッド数が50で、診療科も細かく分かれていません。実は、約30年前、蟹田病院と言われていた時に院長として勤務した経験があり、現在の秋山昌希院長とは青森県立中央病院で一緒に勤務したことがあります。その後も外ヶ浜中央病院へは思い入れがあり、運営に関してアドバイスもしていました。このようなことから新人看護師の研修場所として最適だと思いました。予め見学に行った時に、秋山院長は、若い先生方や弘大からの実習生などと歓迎会を開いてくれました。小堀さんは6月27日から

7月2日まで1週間の研修を終えましたが、研修報告は別の機会とします。

青森慈恵会病院

澤田美紀子さんは青森慈恵会病院緩和ケア病棟へ研修に行くことになりました。がんの終末期に対応する病棟です。美紀子さんはがんの手術後などに手や足がむくむリンパ浮腫という病気を勉強したいとの希望がありました。ただ、リンパ浮腫の看護だけでは不十分なので緩和ケア全体の研修を勧めました。青森慈恵会病院には小枝淳一先生がいます。県内でも数少ない緩和ケア専任の医師です。小枝先生は弘大第1内科での私の後輩で、新人医師の研修などで一緒に活動したことがあり、気心が知れている先生です。見学ではゆったりとした病棟で静かに生活をしている印象を受けました。6月20日から25日まで1週間研修を行いました。この報告も別の機会に行います。



歓迎会の席です。中央後ろが秋山昌希院長、私の右隣が小堀未希さん、左が澤田美紀子さんです。



緩和ケア病棟で、中央が小枝淳一先生

医院の外壁は御影石にしました

現在の医院は16年前に建てました。一度、部分的に外壁を塗り替えたことがあります。大雨で強い風が逆から吹いてくると雨漏りがしたことが何回かありました。いろいろ調べてもらいましたが原因は分かりませんでした。外壁が所々で傷んでいましたし、知らないうちに雨漏りがして鉄骨でも腐敗してきたら大変だと思い外壁を替えることにしました。

外壁を替えるというのは結構大掛かりな工事ですのでちょっと調べてみました。カタログを見ても実際とは違うことはこれまで経験済みです。まず、市内の建物に目を配ってみました。自分

で車を運転しながらではできませんので、タクシーで移動する時に見回しました。そして、暇な時に実際に見に行きました。その結果、外壁には流行があり大体いつごろ建てたものか分かること、雨で汚れが付きやすく目立ちやすい色や材質があること、などが分かりました。

デザインと材料がほぼ決まりかけた頃、石材店の方から新しい提案がありました。それは私が全く知らないものでした。中国から輸入した御影石だということです。値段も高そうでしたが、予定していた外壁材料とほぼ同じでしたので予算の心配はありませんでした。石ですから当然

のことで結構な重さがあり、ちょっと考えると地震で揺らされると剥げ落ちてきそうな感じがしました。しかし、これまでの実績を見るとそんなことはないようです。3月11日の地震ではかなり揺れましたが、被害は全くありませんでした。

これまでの外壁はそのままにして、その上に貼り付けています。外壁の上に金物を貼り付け、その上に接着剤で石の板を貼り付けています。石の板の大きさは60cm×30cmで厚さが1cm程度です。これを1枚1枚貼り付けるのですからちょっと時間がかかります。剥げ落ちそうですが、2種類の接着剤を混ぜ合わせると、接着剤そのものが石のように固まってしまい御影石をくっつけてしまうのです。

完成したのを見ると、予想したよりも落ち着いたものになりました。ただ、単純に石だから硬くて耐久性があるものと思っていたが、石によっては吸水性が高く汚れやすいものもあるようです。今回使用した石は磨いて光っていますので汚れも目立つかもしれません。大きな



中央が増築部分です。外壁は光沢があり反射します。

ビルではガラスを定期的に拭いていますから、これも何年かしたらきれいに拭く必要がありそうです。何ごとにもメンテナンスにはお金がかかります。

この外壁工事と同時に医院の増築工事も行いました。本を置くスペースが狭くなりどうしようかと思っていましたが、どうせ外壁の工事をするのだからついでに待合室を拡張して大きな本棚を作りました。ここはソファがまだ入っていませんので、次の機会に公開します。

医院でのこぼれ話

『体は小さいけど、肝っ玉は大きい』

3月11日の地震の後は停電しました。急いで入院患者さんを自宅に帰しましたが、一人だけちょっと無理かなという人がいました。帰らない場合にどうするかを相談していた時の会話です。

私：「館下さんだと、暗い中でも大丈夫だな」

井上婦長：「館下さんは、意外と玉が小さいんですよ」

館下さんは看護師で女性ですので、玉とは肝っ玉のことです。

私：「じゃあ、どうする？」

井上婦長：「菊池さんに電話しますか？」

私：「菊池さんは体は小さいけど、文字と玉は大きいんだ」

菊池千枝さんは看護師の中で最も小柄ですが、看護記録の文字は一番大きく、「菊池さんはボールペンの減り方が他の人たちよりも早いよなあ」とよく言っているのです。

結局、患者さんは全員帰宅することになり、開院以来初めて誰もいない病棟になりました。当然、菊池さんに電話をする必要もなくなりました。

